

太 棹

第百四十四號



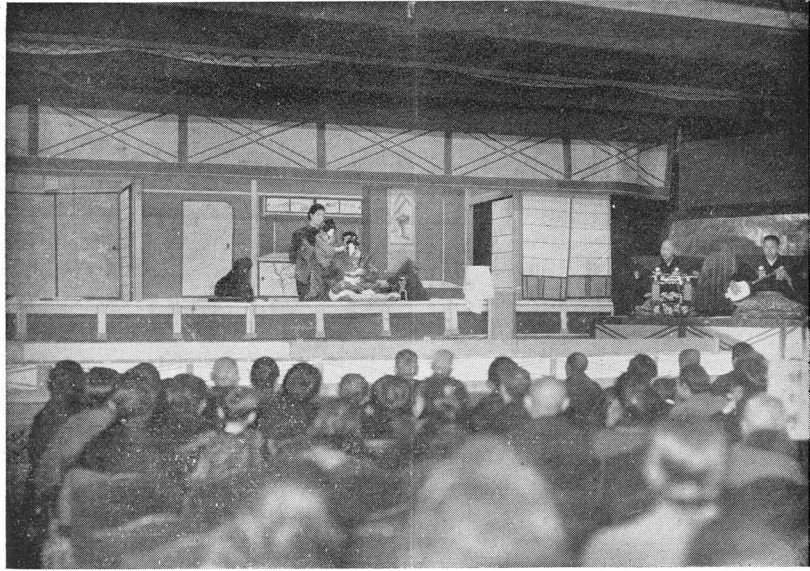
昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十八年四月廿八日 印刷納本
昭和十八年四月廿一日 發行

(每月一回
廿五日發行)

太棹 (第百四十四號)

氏生山藤齋る語を局長



決戦下日本精神の作興を叫び、淨瑠璃の神髓を眞に活かしてこれが發揚に盡瘁、上野松阪屋ホールに於て人形入淨瑠璃の「日本精神作興の會」を主催してその實踐に努めてゐる大日本淨曲協會理事長齋藤金太郎（山生）氏は前月に辰橋、前月は堀川を上演して好評を博したが、齋藤清二郎畫伯の筆になる本誌の表紙繪がその都度偶然にも氏の語り物であつたので、本誌の寺子屋に因みて氏の得意とせらるゝ寺子屋の寫眞を乞ふた處、寺子屋は見當らず、これ又得意の「長局」の貸與を受けた。

寫眞は一月の松阪屋ホールに於て齋藤氏力演の「長局」三味線は豊澤猿藏師。人形は日本淨瑠璃國演會人形部（一人遣ひ）桐竹梅子改め東金之丞がお初を遣つてその熟技に喝采を博した。

風流・金ぶら・茶漬

(美地句)

去月局

新橋二ノ八
電銀二〇八

席貸

並木俱樂部

淺草・雷門

電話淺草二二三五番

御禮

東京臨時第一陸軍病院

太棹百四四號
五十冊

東京臨時第三陸軍病院 同三十冊

寄贈者 齋藤金太郎氏

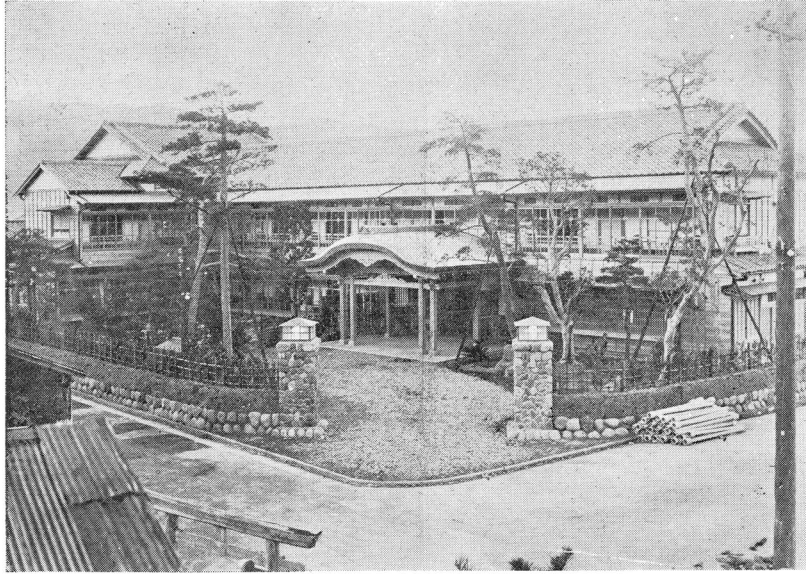
右弊社の趣旨に賛同せられ傷痍將士慰安として御寄贈を賜り候段難有奉深謝候

太棹社

(員會譽名新)

田中丸祐厚氏 (大會員) 太
後藤喜玉氏
尾崎好玉氏
靜岡 諷訪義好氏 棹
同 石井素竹氏 社
右の諸氏今同弊紙を御後援被下名譽會員として御申込を賜り難有御禮申上候

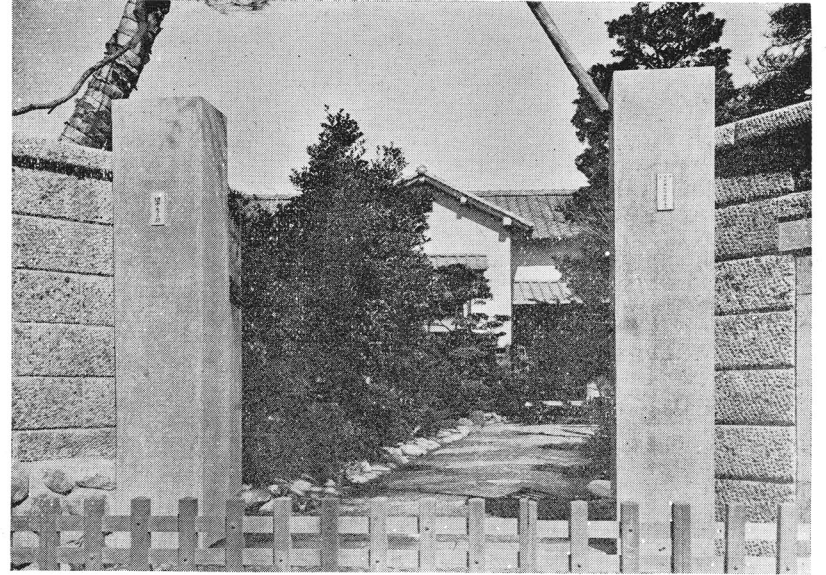
『館島鹿』泉温代網の營經氏月湖



又茨木鉾田町在に敷地千貳百坪の頗る風致に富む別荘があつて、こゝには町の人々や出征遺家族慰安の義太夫會が催される。

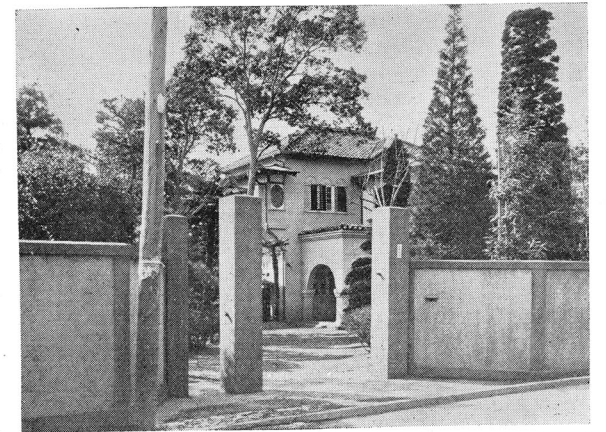
なほ又、伊豆網代にて氏經營の温泉旅館「鹿島館」は右に網代町を眺め左は熱海眞名鶴を一目にして眺望絶佳、湯加減もよし時には船を浮べて釣もよし、或は初島に漕ぎ出すもよし、百疊敷の大廣間には高座の設備もありて素義人の清遊を試むるに絶好の旅館である。寫眞は網代驛前に於ける鹿島館。(電話網代五五番)

氏月湖中田地境の雅清



(宅本氏月湖)

田中湖月氏は豊島區千早町に新居を建築して昨年六月落成。氏は千早町々會顧問の外下谷區に永住せられし關係上同區茨木縣人會の會長の任にあり、縣の公共事業には進んで盡力を惜しまぬといふ重要な地位に置かれてある。



八三一田鉾話電(莊別同)

還曆の高瀬操氏



還曆を迎えて

高瀬操

赤き衣着て歩まんや人の道
赤き誠を心にも被て

五月廿一雷門並木俱樂部に於て高瀬操氏の還曆を祝ふ義太夫會が開催される。
氏は明治十七年八月三日徳島縣横瀨町に生れ、日本特殊工業の重役であり、又至誠堂理化學研究所を經營しての忙中、野澤道之助師に就て淨瑠璃の練磨に精進し、時代世話物共に可ならざるはなく、陣屋、太十鮎屋、新口、橋本、壺坂、先代等は最も得意なるものにて既に素人の域を脱してゐる。現在在東都五十義會の審査員にして又副會長でもある。

祝賀會の出演者は桔梗、千晴、旭、つばめ、國聲、龜鶴、靜、正風、喜風、清、文久、春和、三芳、光樂、關路氏等帝都素義界の巨頭重鎮揃えであつた。



太棹 第四百四十四號 目次

表紙・カツト……………齋藤清二郎

口 長局を語る齋藤山生氏・清雅の境地田中湖月氏
田中氏經營の網代溫泉鹿島館・還曆の高瀬操氏

藝能事時覺え書……………伊藤紅二(三)

文樂通信……………西尾福三郎(五)

稽古嫌ひの新左衛門……………齋藤拳三(八)

文樂圖譜……………宮尾しげを(二)

女義短評……………内田三千三(三)

會報・消息……………(一五)

淡路及び京阪の旅(岡田蝶花形) 北京の慰安會(竹澤龜次郎)

五十義會版……………(一八)

太棹社彙報……………(二〇)

當座帖……………

編輯後記……………富取生

藝能事時覺之書

伊藤紅二

近頃、自分の身邊に雑事が多く、打込んで學究と云ふことも甚だ縁の遠いことになつたが、それだけに近接した手近な所に、恰好な研究材料が、ころがつてゐることに氣づくのである。

先づ自分の仕事から云つても、勤勞大衆の教育、厚生、慰安、娯樂と云ふ方面から云つても、藝能と云ふ文化材が、甚だしく無系統に並べられてゐると云ふには身の毛のよだち様なおそれをさへなしてゐるし、又、それだけに、其の部門の仕事が如何に大きな役割をもつてゐて、生産増強、能率増進に資することが大きいかを切實に思はせるのである。

だから、之からはもつばらこうした民力涵養とか、生産勤勞部門の増強に關してのみ考へてみたいと思ふて道は近きにありと云ふことを切實に感じてゐるのである。

待のもてる所である。

それにしても、矢張り、其の中樞々要の地位にある人が、勤くも指導力を持つた誰をも盲背せしめ得る人でなくてはならないことを思ふと、やゝ日暮れて道遠しの感もないわけはない。とにかく仕事は之からであり、情報局改組のことは國家がこの大東亞戰必勝の爲の手であつてみれば、やたらにはたから私議や暴評もつゝしまねばならないと考へてゐるが發表があれば矢張りそこに感なきを得ないのは人情であらう。民間の權威簡拔に先行する當局の指導力を云爲したが、之は何時如何なる場合でも必要のことではあり、こうした緊迫した時局下には殊更に強く之が要請されねばならぬ。其のものと樹つて始めて末は盛り、木々は繁茂し、藝能文化の花が咲きそるふものとするべきである。

もとの基本的な指導精神がはつきりしない所によい意味の健全娯樂が生れやうがないのである。其處で有識具眼の指導者を待望してやまない事情があるのである。

從來は概して當局の役人にはかゝる具眼識者はおるか、轉々とその官等や地佐の動く度に猫の眼の様に動きまはつてじつくり、其處に腰がすはつて、扱て藝能文化に一隻眼乃至は造詣を持つと云ふ様なふくよかな氣持を持ち合はせてゐるものが尠なかつたのを遺憾とするものである。

それはさておき、最近の藝能界を一瞥しただけでも、とり上げて研究材料によるだけのものはごろついでゐるので、さし當り之に着眼する。

先づ、情報局の改組で、其の重點的な組織内容がはつきり讀みとれたことは國家的見地からみて無論、結構千萬なことであるが、之が藝能方面に於ける接觸面も、其の重要視されてゐる點と、更に從來の第何部第何課と云ふ様な無趣味殺風景な呼び名があらためられて、はつきりと藝能課と云ふ名前をもつて呼ばれる様になつたことだけでも、而して又、専任の課長も近く正式に發表の運びになつてゐることなどまことにあかるく、うれしいことである。

しかも、其の上に斯界の權威を簡拔してこの部門の強化と啓發指導に當らせると云ふ意嚮もあるとのことだから民間の其の道の所謂野に遺賢もなくなるだらうと、今から大きな期

なほ最近に於ては、其のもつとも直接に衝にあたるべき人々の中にいまはしい話しを聞くことさへあるのは何としても現下の國情にてらして不問に附すべからざる不祥事と云はねばならない。

眞の指導は何處までも、其の物に對する深き造詣と而して人格の點に於て絶對にすぐれて居るべきである。其の時局下に指導教化部面を擔任するものにとつて、之はくれぐれも當局に願はしい條件である。

情報局が改組されるについて、こんな感を深くしたので、先づとり上げたが、情報局その物はやはり強化擴充されたと見ることが至當の様で、之はくりかへすが嬉しいことだ。

次は、四月の芝居があいたので、團菊祭で幸四郎の大森彦七を観る。

竹本と常磐津のかけあひで、しかも「太」の大味な音色で開幕して行くあたりは前の主題としては誰かの批評の様にあまり感心したものではないにしても、とにかく上品なよい芝居たるを失はぬ。

九代目ゆかりのものではあり、幸四郎にははまつた役柄でこの度は芝翫が選ばれての千早姫だが、筆者は秀調、我童、松蔭、其他若い連中のもも大抵見てゐる様な氣がするので、この度の成駒屋にも、非常な興味もてたわけである。

こうした史劇めくものに義太夫の色づけは缺くべからざる

もの様である。

千早姫を代表する常磐津の哀婉を纏つて、太掉の豪壯と物語り風な所がこの全曲を如何に古典の中の眞實味にあふれさせてゐることか。

勿論、時局的にみても其の取材が悪いものではないが、それにもましてこの曲のうらづけに大きな力をまさしめてゐるものは太掉の持つ藝術味であると云はねばならない。

大森彦七に太のあしらひがある如く、明治座をのぞくと木村富子氏の「高野物狂」が上演されてゐた。

勿論、猿之助の出し物だが、之が矢張り竹本の出語りとなつてゐるので、ここではからずも、歌舞伎、明治で「太」の競演と云ふことになつてゐるのも面白い。

この初演は昭和二年十一月の本郷座で、主演が今月同様猿之助であるから、之れは澤瀉屋一手販賣と云ふ處かも知れない。

花若丸は中村兒太郎であつたから相當によかつたにちがひない。

矢張り太掉の件りで

「ありし昔の花の袖」

「ありし昔の花の袖」

今日墨染と匂ふかな、

悼はしや花若丸、



文 楽 信 通

西 尾 福 三 郎

禍も三年経てば福とやら、文樂の晝間興行も一部の人々

―主として批評家筋からは好評であり乍ら、今日迄はとかく興行的には餘り香ばしい成績ではなかつた。ところが去る三月中頃より夜間燈火管制が強化された結果として、夜の九時頃ともなれば殆んど街燈はすっかり消されて、今迄明るさに押れ過ぎてゐた都會人をすっかり閑娛つかせて、それが爲夜間の外出が自然に減少してくるので興行物も従來とは逆に、夜よりも晝の部に客足が多くなり出した。その結果として自然不入り勝だつた文樂の晝間興行も今月あたりから幾分入りが増すと云つたやうな事になつてくるのではないか。無論演し物の良否にもよるし、晝間を受持つた人々の努力の如何にもよる所は大いにあるだらうけれど、大體の理由と主な原因は主として前述の事由によるのだから、當事者たるもの夢々己惚や自慢は禁物である。否折角よい傾向を來した事に更らに緊揮一番大いに晝間興行に一層の吟味を加へてほしいと思

思はぬ嵐に散りのこる、
わが身一つを漸うと

故郷をはなれ紀の國や

高野の山にたらちねが……

とあるから場所は即ち高野山と云ふことになつてゐる。

物狂ひ、實は高師の四郎、花若丸實は平松春満、それに里の子、足利の家來などをあしらつての舞踊劇である。

去年越前の藤島で討死した新田方の大將平松左近の忘れ形見が即ち春満で、これが高野の山奥にのがれ、花若丸と名のつて稚兒姿に身を變してゐるのであるが、物語りはここから發端の糸を繰り出すのである。

これが矢張り、竹本のおかげで非常にとくをしてゐる芝居で、この所、太掉萬々歳と云ふ所である。

扱て酷しい時局下にあつて、どうしても勝ちぬかねばならぬ必勝理念の一つの要素に、勝つ爲の餘裕と云ふ様なものを想定すべきであるとかね／＼考へてゐた。

而して其の餘裕といつば藝能による心のやはらぎ、しづ心、ふくよかな民力と云ふ様なものであらねばならぬことは幾多の事例から云へることである。云はば物資の上での酷しさにも比して緊急な問題は心の上にこの酷しさをなごませる所のものが不可缺であると云ふことを當局も、大衆も、世の先達も、指導者もが持ち合せ度いのである。(七頁(續))

ふ。

さて本月の晝の部通し狂言は二十四孝の一本立て。通しと云つたところでこの時間内で桔梗ヶ原から十種香までがやつとで、三、四段目を何うにか見せられると云つた程度で、中で珍らしい場面は十種香の前に簀身代りを説明した景勝上使の段が出てゐる事だ。例の種ヶ島鐵砲を牢屋へ入れてある珍場面で、これをもう一つ説明させる爲には是非共序に明神前の場を出さなくてはならない。明神前から狐火までの通しを見せたのはもう十數年前で、確かまだ朝太夫松太郎在世時代だつたと記憶してゐる。がとにかくこれだけでも通して見せられたのは晝間興行のあるお蔭だと思はねばなるまい。桔梗ヶ原、筒堀り、十種香と次々に手をかへ品をかへて展開する半二のバラレリズムを味はふのによい機會である。何しろ相當な長帳場で、これを下手にやられると随分退屈なので今度のやうに下駄場、住家、物語と三つに區切つて出してゐるの

も練習曲並の取扱として一應は是非なしとしておかう。太夫では桔梗ヶ原の切り二人彈正を語つた濱太夫が歸還以來の好演をきかせた。何處やらに故乃津太夫の語り口を彷彿せしめる個所があり、それに岳父寛治郎の絃に助けられて、ともかくも一應物にしてゐる。その他では大隅が慈悲藏の條りを受持ち、住太夫が横藏を受持つた形になり、人形の方も龜松と光造が慈悲藏と八重垣姫の交り番、榮三郎がお種と勝頼と云つた受持ちで、これ又若手三人の競争と云つた形で、何れも競演氣分が濃厚に現れてゐて、各々相當な出來を示してゐる。大隅の慈悲藏は地味すぎて損をしてゐるが、住太夫の横藏はこの人の語り口に合つてゐる爲か比較的無難の出來である。十種香の場は重太夫で、例によつて媿々とした語り口で抑揚に乏しいが、絃の廣助が久しぶりでこの人の本領をきかせた。狐火は故春太夫の門弟三瀧太夫改め叶太夫の改名披露の持場であるが、清八の絃と共にこれも無難。押しなべて何れも優とは云へぬが佳でもない。先づ良か良上と云つた點數である。紋司の使つた濡衣がお約束の黒紋着でなかつたのは色彩のバラレリズムを破壊してゐる。

夜の部は序に橋本關雪畫伯新作と云ふ珍らしい肩書きつき佐藤兄弟の妻と云ふのがある。見ぬ先には又先月のやうな現代劇の新作かと思つてゐたが、これは橋南溪の東西遊記に

たゞ阿古屋の憂ひと云ふかくされた氣分に思ひ到ると、これによいのだらうかと一寸考へさゝれた。かうなると亡き新左衛門を偲ぶ事切なるものがある。太夫では相生の岩永が久しぶりでこの人らしい几帳面を見せ、門造の人形もよかつた。人形は文五郎一役、紋十郎と榮三が二役で、文五郎は休み、その代役の重の井を紋十郎がつとめてゐる。榮三の今一と役は新作の佐藤兄弟の母親であるが、人形座頭としての責任上新作とあれば決つてこの人を煩はせてゐるが、一方の文五郎がとかく病氣勝ちのこの際、勢多くして效勘き新作に、この老大家を疲らせる事は一考すべき點である。

(四頁より續く)

しかも、こうした緩滑油にも比すべき藝能文化材はいやくも、戦意を些かなりとも鈍らせたり、ぎこちなくさせたりくもらせたりする様なものでは絶對にあり能はぬと云ふことを之また勝ちぬく國民の常住の意識として堅持して居るべきであると思ふ。

世の先覺めくわけではないが、戦ひが、のるかそるか瀬戸際にあるときに殊更にこの感を深ふるが故に特記するわけである。

ある繼信忠信兄弟の母が幻をみるあの物語りである。兄弟二人の靈が現れる條りをもつと幽幻に取扱へば却つて面白いものになつたらうが、時局的に軍國の母として取扱はうとしたところに却つて失敗してゐる原因があるのではないか。舞臺の色彩、音調、詞句すべてに高雅なねらひのある事は分るが新作にしては文章の表現が例によつて脚色者の古い癖を脱しきつてゐない。全體の取扱ひ方も佐藤兄弟の妻と云ふ題意よりも佐藤兄弟の母の題意になつてしまつてゐる。シンの道八が例によつて名前だけ出して顔を見せないのは、羊頭狗肉である。

重の井子別れば後半織太夫の受持ちだけは遠がにきかれるが前半の源太夫はとても持ちきれてゐない。かけ合ひ許り語つてゐると、かうした稀々の一段三分の一がところも満足に語れなくなつてしまふから義太夫と云ふ藝は怖ろしい。技術の前に體力も必要である事を痛感された。

古鞭の新口はいよ／＼枯淡の趣を加へて、この人も娛しき乍ら語つてゐる風が見えて結構だつた。殊に孫右衛門が人形の榮三と相俟つて趣味横溢、それに清六の絃が雪の世界に一點の艶を點するやうな風趣をよく彈き生かしてゐた。せきぞろの條りを加へたのも一寸したのだが、かうなくてはならない。

切りの阿古屋は觀西翁の絃によつて頗る多彩にきかせた。

欽道省指定
東洋旅行社

元北條 西村銀司

杉乃井籠

如府觀海寺 電話番号、八三八

稽古嫌ひの新左衛門

齋藤拳 三三

二代目豊澤新左衛門が死んだ。あの天才的な、無邪氣な官能的な良い音色も聴かれなくなつたのは、文楽名物の一つを失つた寂しさである。

新左衛門の三味線は嚴格に云へば、三段目弾きでも四段目弾きでもなかつた。松三郎時代から理想的なタテ端場弾きだつたのである。

太夫に死なれた三味線弾き程、不運な藝人は他にはあるまい。實際的には新左衛門の晩年の不運は春子太夫に死なれた時に始まつたと云つても過言でない。

鍛太夫を弾いてる間の新左衛門は表面的に見た程の良縁では決してなかつた。新左衛門にすれば弾いてやつてる鍛太夫であり、鍛太夫の方では弾かせてやつてる新左衛門だつたのである。

讀者には弾いてやる新左衛門の方は解るであらうが、弾かせてやつてる鍛太夫の方は見當がつかないかも知れない。事

す」と語つた。

新左衛門好きの筆者には何と云ふ嬉しい言葉であらう。其時である、鍛太夫と別れ、はもう東京では新左衛門の名音も聴かれぬと思つたので、決して新左衛門を手放してはいけな

いと進言したものであつた。
翌年鍛太夫に會つた時は二人の間には大分もう溝が出来てゐた。「おやじさんも右の方の耳が悪いので」と云ふのである。此時に私は「其れなら太夫が左側に座つたらよからう、太夫は必ず右側と云ふ憲法もなからうから」と云ふと人の善い鍛太夫は驚いて眼を見はつたものだつた。

鍛太夫の不満は「走つてくれない」と云ふ言葉だつた。筆者には其の言葉の意味が呑み込めないので其時出てゐた『壺坂』、其れを例にとつて、すかさず質問を切り込んで行く丁寧に説明してくれたので私は直ぐノットに取つておいた。此れにも鍛太夫は晒然として居た。

新左衛門の晩年の不遇は切符賣りの出来ない事と、もう一つ有名な稽古嫌ひにあつたと思ふ。この老大家の藝は天才的な藝風で、決して凝つた藝ではなかつた。藝談の無い人で、も一つ直言すれば若い人の稽古臺には向かなかつた。

新左衛門が文楽へ入座した時は恰も古靱太夫が三代目鶴澤清六に死なれて、相三味線に飢へてる好期であつた。人一倍稽古熱心な古靱太夫と、人一倍稽古嫌ひの新左衛門とは永續

實鍛太夫は時々師の土佐太夫の處へ愚痴をこぼしに行つたのであつた、事新左衛門との別れ話になると、土佐太夫は鍛太夫が半分云ふか云はない内に、一言のもとにはねつけてしまつたさうである。筆者は聰明な土佐太夫と人の善い鍛太夫との會話が安々と想像出来るのである。

筆者は一度だけ此の三絃の名手に會つた事がある。演舞場の千秋樂の役場を終へた二人の部屋で、當夜の夜行列車で歸阪する新左衛門は荷作りにも多忙で、ろく／＼話をする間もなかつたが、鍛太夫の方は翌朝ゆつくり出發するので時間があつて色々な話が出た。

「松竹さんの方では若い三味線で（給金の安い三味線とは決して云はなかつたが、筆者はさう云ふ意味に解釋した、私の邪推であらうか？）上京する様にとの御希望の様ですがこんな甲斐性のない亭主でも永年持つてくれたのですから、新左衛門さんが休ませられるのなら私も休むつもりで

きのする筈がないのである。すぐ別れ話になつたのだつた。鍛太夫の死後呂太夫を弾く様になつた。彼は餘りにも老い込んでゐた。呂太夫の役場の端場ものは大抵忘れてゐた。そして彼は歳も位置も下の廣助の所へ教はりに行く始末だつた。廣助が禮を厚くして「當方から稽古に出ましますから」と云つても決して聞き入れなかつた。座布團さへ決して敷かなかつたさうである。老藝人の風格躍如たるものがあると思ふ。

現今文楽中最も稽古熱心な呂太夫の相三味線としても、彼は決して適當な存在ではなかつた。これもすぐ別れ話となり若手のカケ合など弾いて晩年を送つた。

彼は豊澤キーン左衛門と云はれる位有名な金太郎だつた。土佐太夫、吉兵衛（當時伊達太夫、吉三郎）初役の酒屋に、彼は鍛太夫を弾いて始めて端場を務めたのである。弟子のTに、己れの後では吉三郎はふるへて撥が皮におりまい」と云つたさうである。Tは餘りの無邪氣な大天狗に腹をかかへて部屋の外へ逃げ出してしまつたさうである。

筆者の友人Hは二十五年前の新左衛門を聴いて、新左衛門程悪くなつた三味線はないと云つた。これにも私は驚いた。弾き盛りの彼の三味線が如何に美事なものだつたかが、たやすく想像出来ると思ふ。

もう一人の筆者の友人Kは新左衛門とは三十年來の親交のあつた人だつた。大好物のあなごの天ブラを食べた後一旦那

これから何か弾かせて下さい」と云つた。これは後にも先にも只一回の言葉だつたさうである。これも新左衛門の鮮かな一断面であらう。

豊澤松太郎が朝大夫を弾いて下阪して文樂へ入座した時である。松太郎の高座へ三味線を持つて行く弟子が一人もゐないので、新左衛門は「已れに勤めると思つてやつてくれ、其れでなければ已れがやる」と云つた由である。此の話も物堅い吾が國特有の老藝人の本領であらう。

さもあらばあれ、吾が豊澤新左衛門は昔の三味線弾の様に稽古屋にならずに不遇の内に死んだ。彼の藝が老ひ込んでも少しの間延びなクサ味もなく、竹を割つた様な妙音で、腕も決して強い方ではないが、さりとして弱腕でもなく、逆境ながら芝居の床にも出ず、人形淨瑠璃の床を終始守り通して死んだのは、吾々最負にとつては、一脈の氣安さをおぼえるのである。

本日拙稿を了し彼のレコードを聴き冥福を祈らうと思ふ。

文樂圖譜解説

宮尾しげを

- (い) 島臺 妹背山御殿鑿七使者の際に用ゆ。島臺高さ四寸、横一尺三寸、全高さ一尺四寸、梅は紅白。
- (ろ) 檜扇 妹背山御殿で官女が持つ。紐は紫、赤、卵白、緑、薄水の五色で長さ一尺三寸、扇は高さ一尺、厚さ一寸六分、要の厚さ七分、板は二十枚にて開いた處一尺四寸。

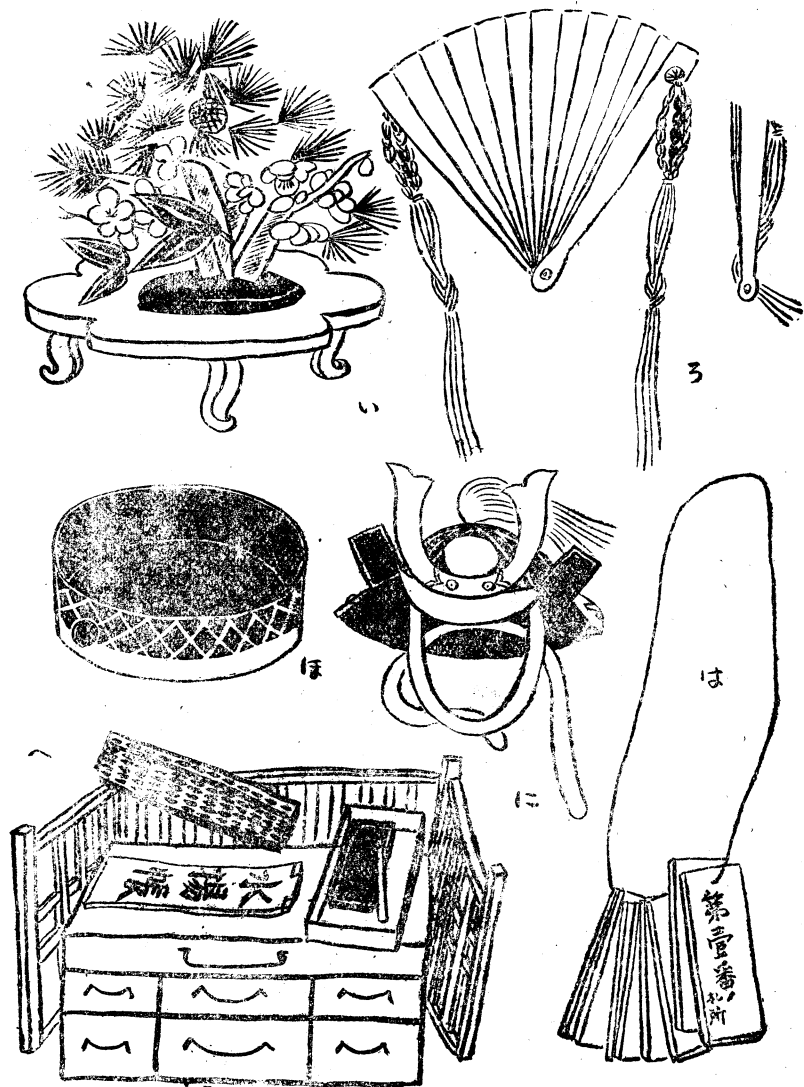
- (は) 巡禮札 阿波鳴門のお鶴が首にさげて来る。天地三分二分、横一寸一分、厚さ二分、八枚の板を長さ五尺の紐に通す。

- (に) 兜 七福人寶入船の毘沙門天が被る。上の赤房を取ると、忠臣藏大序兜改めの兜に使はれる。紐のつけ方が文樂式で前の方はU形になつてゐて、そこへ額を差し入れて、後にある方の紐を前にもつて来て結ぶ。この方一尺三寸の長さあり、左右八寸、高さ五寸。

- (ほ) 手洗桶 伊賀越に使ふ御殿用手洗桶、直徑七寸五分、高さ二尺三寸。

- (へ) 帳場 大文字屋に出る帳場机、高さ一尺五分、横一尺四寸、奥行七寸。視箱、一尺二寸の算盤、半紙綴の水揚帳、けつかい高さ一尺二寸五分、正面幅一尺六寸、左右幅九寸

文樂圖譜 (二のそ) 尾宮しげを



春夏旬屑

榮 芙蓉

寺町や往く人絶えて散る櫻
この奥に石きざみをり百日紅
色眼鏡かけし女や雲の峰

女義短評

▼ 鸚鵡會
▼ 猿春會
▼ 駒龍會

内田三千三

鸚鵡會

土佐廣(綱助)の「鰻谷」は楽しみにしてゐたが、聴き應へのある前半を抜いて、お妻のクドキ「心に泣けど目に泣かぬ……邊りから後半を語つたのは失望させられた。「鰻谷」はお妻の縁切り前後に力點の籠る情魂交錯の滋味がある。土佐廣の此の段は定評ある圓熟の語り物で、淡品のある語り口と、潤美な餘情が眞世話の巧さを流露させるが、主要人物の心理を性格的に掘り下げる深さと情痴性の濃密さに乏しい。殊に彌兵衛は鰻谷の彌兵衛にならず、

土佐廣の彌兵衛になつた。むせるやうな情痴感を淡彩に美化して、サラリと運ぶ潤ひのある演出法は分るが、彌兵衛は惡の徹底と好色な情痴がドス黒く浸透せぬと「殺傷の悲劇」が引立たぬ。銀八も苦澁なく器用に語るが、質實な仁俠感が力強くモリ上らぬ。一體にお妻のクドキが秀逸で、綿々たる哀愁を巧緻に描いて愉しませた。

染登(猿幸)の「先代」は格調の正しい重厚な迫力に富むが、加ふるに優美な氣韻がウンネリと基底に流れれば完璧で、只此の人の短所は、油が乗つて最高潮へ来ると精彩奔出して淨瑠璃が冴え／＼と光澤を帯びるが、力を矯めて語つてゐる間に藝感のゴツさが多少ある。腹も技力も逞く美しい能腕の人だけに、風雅な香りを淨瑠璃に添へ度い。「雀や犬」の箇處が、絢爛な技法で鮮かである。派手な演出法の裸に充實した技倆の裏付けがあつて深い象徴性がある。

は闇にすかし見る間が急短に過ぎる。以上を小仙の良き「沼津」の四つの疵とする。

人物中では、十兵衛が壓巻で、急所々々の巧さと意氣がヒシ／＼と深點に觸れる。就中「何心なき話の合紋」から「一々胸に應ゆる十兵衛」への足取りの佳さ、心韻の鮮動は優れてゐる。

「金のやり度」……の喰ひしぼる哀味は津々と胸を揺ぶる「心に一物荷物は先へ」……は圓熟鮮妙だ。

平作は小揚げで一鱗の名物がござりまつせ……の「まつせ」になんとも云へない哀調を帯びたユーモアがあつた。

「何故に此有様」から「エ、何の因果で」……へ變る段取りの巧妙さは鮮腕發揮だ。お米のクドキはサラリと演つて陰々たる哀れさを出す、この人にしては意外に潤ひと艶が淡い。其處より「風」ふつと「……が織妙で旨い。小仙は節、詞、カハリの見事な三絶の

女太夫だ。……が不思議に無器用な處を語る時、器用の不器用さになる。藝彩陸々たる小仙に望むものは、圓熟の極致から生れ出る蒼古たる錆である。

猿春會

席に就くと、重之助勝八の「戀十」の舞臺が開く處だつた。

この一段では澁く澄んで美しい引き締つた勝八の絃が楽しめる。重之助の演出は清淡な哀愁を流麗に描き出す。藝品のある語り口が眞摯で佳い。

「鳥羽の祭りの餅が喉につかへて」は稍淡彩である。過去の悲映を陰影深く滲じます演出を工風して望ましい。

「夜は杓打ち草鞋つくり……のつくりは餘韻々々と迫つて白眉だつた。段切れの「馬子唄」の雨が降る。「雨が……は少しく陽音が濃く映つた。あれは時雨のやうな陰音であり度い。それと三吉の巧い人だから「合の土山」……の最初の土山を「つちやま

小仙の「沼津」故東廣の沼津は「女津太夫」と云ふ藝感を與へた、小仙のこの一段は、「女古鞞」を聯想させる。人物分描の妙とそれを貫く巧緻な氣韻は、女義稀に聴く秀絶の「沼津」であつた。只一彈き語り」と云ふ演出上の特異性が終段に禍因を招いて「跡に見捨てて……以下の斷腸感を稀薄した。あれだけの腕を持ち乍ら段切れのエグられるやうな悲愁のモリ上りが淡彩なのは、かかつて彈き語りに依る演出焦點の分散化に基因する。

次に平作の「旦那様、おさらば」……の旦那様が切迫感が濃出して愁然胸を打つ淋しさに缺けた。地底に沈んで行くやうな深寂なる諦めが漂つて欲しい。小仙のはやや激情的になつた。

お米の「お嬬りなさを眞受にして」はモット憐美な艶愁があり度い。貧に襲れた哀れさの中に洩々と泌み入る眞心と優婉な色香を立ちこめさせ度い。孫八が出會ひがしらに云ふ「瀬川様か」

「……と詰めると郷愁と可憐さが一層加はつて良韻漂渺と深出しやう、全體に簡素な美しさを持つ「戀十」であつた。

素昇(猿玉)の「白石嘶」……は惣六の意見を中心に短時間の演出の爲め、期待した程情感が迫らなかつた。手堅くと雄達に語る惣六も一寸武骨で、イヤミはないが、粹も甘いも嚙み分けた澁い艶が足りない。コセつかず、ゆつたりと幅を持たせて、タタミ込む手腕は老熟だが、眞實味の外に光澤が欲しい。

猿春(三生)の「伊賀五」は前半は風味に缺け直線的だが、奥へ行く程底力が出て力作だつた。

作魂にヒタ向きにぶつかつて行く逞くましい強靱性と不屈の敢闘精神は雄徑な幅を生んで迫つた。雄洋たる藝味に深巧な滋味が盛られることが大成への捷道である。

以下雜駁な粗感を痲痺する。マクラの「奥へ行く」を慎重雄密に

語る爲めそれに力が這入り過ぎて「心がけある侍は……が餘韻と含蓄が滲じまらず平坦になつた。本文がマクラに負けた形である。

全體に唐木を地を這ふ虫にも心を許さぬ鬼を欺く政右衛門として表現とする、演出意圖が濃出して心に雄厚なウネリを持つ生酔ひの滋趣が極めて稀薄だつた。饅頭娘の前半は政右衛門の虚々實々、しらふと生酔ひの緩急轉換に滋味がある。それを語り生かしてこそ興趣と深情が湧出する。

それと演出が餘りに生眞面目で胸底に憐情を秘めて外へは突放すお谷への夫婦の情が淡かつた。生酔ひの詞の裸に裏の心が籠つて欲しい。五右衛門が出て来ると政右衛門は輪廓がクツキリ出て味が出て来た。

「去つた仔細は別儀でない……から「飽きました」へカリリと變る呼吸は出来たが、望蜀には對者の意表を衝く洒脱さがありたい。

お谷は清冽過ぎて柔軟味のある潤愁が足りない。五右衛門は意外に巧く茶氣のある一徹さが貫流して愉しめた。

駒龍會

猿春、津賀昇と俱に女義江東三羽鳥の駒龍が、思ひ出の東橋亭に藝道再出發した。三日目の「新版歌祭文」を聴く。駒龍は藝感に於て小越駒を想はせる。淨瑠璃の色彩が抒情的でエグつた深さと澄み切つた清さに乏しいが、巧者な演出線を辿らうとする技巧味が小津賀の長所を模してゐる。

この人の「野崎」では久作が達者なのが耳につく、「出て来る久作」……で人物の輪廓を色彩的に感じさせるのが一寸面白い。……が全體にモット眞情味が加はるとグツと良くなる。大抵の太夫が省く病母の件をミツチリ勉強して、久作の性格表現を研究することを薦めたい。

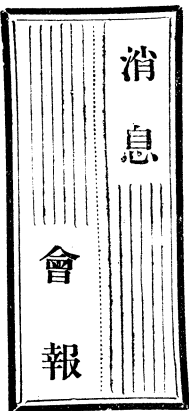
「病苦をこたへてゐるアノ婆さまに」

の邊り流暢で達者だが陰影のある情愁を滲じませ度い。お光はヒドク強氣に語る、線がキツ過ぎて潤ひと衰れさが足りない。

「百姓の内に改まつた用があるなら這入らしやんせ」……を稍切口に云ふ、あれはお染と心づかず、さりげなく云ふアドけない在所娘の氣韻が欲しい。そこをぼんやり演つてこそ一あた可愛らしい其の顔で……の格氣の焰が鮮描されるのである。

お染はお光に比べて遙かに情合と味がある。久松は一通りだが艶のあるのが悪くない。總體に調子で持つて行く器用な達者さをモウユガキユガイイで心で語る深美性を創出させ度い。

外に氣魄の貫流は淡いが隨所練巧な味を出す住若、清一の「安達」とに珍らしい「盛衰記」の神崎揚屋を情熱を持つて語る巧者な小津賀、紋教の「梅ヶ枝」につづいて重之助、勝八の「壺坂」が壓巻で泌々と聴かした。



(乞通信)

淡路及京阪の旅

岡田蝶花形

四月十六日出發、四月十七、十八日淡路國洲本市にて學校衛生の講演を全州本市の國民學校の訓導、學校醫、母の會と三ヶ所にて講演、ついでに十九日は阿波の鳴戸や淡路名物のデック人形を見せて貰ひ、二十日は神戸相生座をのぞいて夜は文樂座を聴き、二十一日は道頓堀俱樂部の淨曲座談會二十二日は京都帝大樂友會館にていづれも義太夫を語るつもりです。淨曲の本場で語るのおこがましい譯ですが、一は研究材料に一は舊友への土産に何もない

から義太夫でもといふ譯です。

春の潮うつまく方の淡路なるわが夢に入る淨瑠璃の國
いくたびか古へ人にうたはれ 淡路も遂にわが歌に入る

北京の慰安會

竹鐸龜次郎

御社益々御隆盛の段祝福申上ます。
陳者此度四月十六、十七の兩日晝夜二

回開演にて北京燈市口飛仙劇場に於て戰捷二年皇軍慰安演藝會が幾久家主人豆塚様の主催、北京日本舞樂協會の熱誠なる後援にて開催されました。出演者は幾久家方の藝妓七十餘名、それに補導として藤間勘八郎師、芳村伊之助師、常盤津正加代師、清元三家津師、柏要三郎師、竹澤龍造師、及び振付け後見人として豆塚様始め御一同様の御懇望に依りまして不肖一座の竹澤龍富美、又添人として二代目龍喜代兩名が

御依頼を受け三月廿三日東京を出發して無事盛大の内に閉會致し再度明年春の慰安演藝會振付けを御懇望され上々の首尾にて無事四月二十五日朝歸京致しました。四月六日は別に皇軍勇士の慰問も致し大變に喜んで頂きました。
番組は(一)常盤津三番叟、(二)清元六玉川、(三)長唄小鍛冶、(四)古蹟之松中將姫、太夫連中政江様、糸龍造。
(五)常盤津乘合船、(六)長唄五糸色、(七)壺坂靈現記、太夫連中關長門様、糸龍造、(八)亞細亞音頭
尙幾久家主人豆塚様は此日金一萬圓を献金せられたさうであります。

▽田中湖月氏 茨木の鹿島神社に樓門が竣功したが未だ隨神象のない事を宮司富岡彦盛氏は神慮に對し遺憾とされてゐた處、今回田中湖月氏を筆頭に隨身奉獻會に於て文展審査員三木宗策氏の作になる幅六尺、丈九尺五寸の右大臣左大臣が進納された。

▽近江清華氏 近江清華氏は新京市に「東亞文化圖書株式會社」を創立し軍關係の著書出版の外青森地方の事業にも忙しく、此方面への旅行頻繁のうち目下真名鶴に新居の建築中である。

▽伊藤松鶴氏 伊藤組の工事は市内並びに地方合はせて多數の現場を有しその發展は目覚ましいものであるが、川崎在鹿島田、千葉の蘇我、朽木の雀ノ宮、立川等は最も大なるもので、その爲め松鶴氏は日夜繁忙を極め久しく休演を餘儀なくされてゐるが、蘇我の工事は最近歸還した令息に一任、又近々除隊の次男にも方々を支持たせ、追々小閑を得て日頃忘れられない義太夫を語りたいたの事である。

○~~~~~○
▽靜 淨 會 靜淨會は今回會員名簿を發行。會員百五十餘名より成り、巻頭には役員の寫眞を掲載し、表紙は文樂人形頭のオフセット版にて頗る凝つたもの。役員は技藝顧問(竹本大隅

六回四月十五日開催。八陣(津賀生)辨慶(素次、清三)安達(素八、駒登久)野崎(小津賀、紋教)阿古屋(住若、清一)——(六十七回、五月一日) 揚屋佳世子(柳(素次、清三)寺子屋(若好、巴住)新口(染登、猿幸)先代(素八、駒登久)——(六十八回、五月十五日) 草履打(駒榮、小政)鳴門(素次、清三)十種香(住若、清一)柳(重之助、猿幸)太十(素八、駒登久)

▽大日本素人淨瑠璃會 大阪大日本素人淨瑠璃會は六月一日より五日迄北陽演舞場に於て第十五回競演會を開催。審査員は竹本大隅太夫、竹本住太夫、豊澤團友、野澤吉彌、鶴澤清八、伊東柳平、吾孫子權、笹村ふんどの八氏にて東京よりは紅司、雅樂、喜鳳、正鳳氏等出演。

▽義太夫「日の丸會」 新京市竹本喜美太夫連の「日の丸會」は五月廿一日開催。組打(喜の字)酒屋(喜久水)新口(喜春、忠六(喜昇)鳴戸(喜代志)忠四

太夫、竹澤伸造)顧問(岸竹史、星野桔梗、徳永靜翠)會長(山田壽瓢)理事長(時田壽史)理事(吉良蟻若、影山淺路、八木勝駒、淺井蝶花、増田喜城、河守痴樂の諸氏)なほ名簿は徳永靜翠氏寄贈に依る。

▽むつみ會 豊澤和孝連の「むつみ會」は例に依り小田原一みの政一樓上にて四月十二、十三兩日午後六時より小田原峰太夫會後援の下に銃後慰安義太夫會を催ほした。(十二日)忠六(光仙)紙治(壽昇)合邦(竹糸)儀作(勇昇)安達(義昌)——(二日)妙心寺(光仙)沼津(勇昇)宿屋(米)太十(壽昇)野崎(掛合)絃(和孝、阿生駒、督八)

▽挑 李 會 女流淨曲桃李會は四月廿七日正午より松坂屋ホールにて第二回を開催。合邦(里松、清一)山名屋(都一、清二)先代(里芳、勝助)十種香(以與子、良造)縮屋(つる子、勝八)鳴門(和子、重之助)新口(君香、都太夫)

▽南 北 座 昨年より休演をして諸々研究整備中であつた池田三國氏主宰の南北座は愈々六月より公演する事になつた。

▽波多野光雨氏 俳號(三樂)波多野光雨氏は「ナチスの女性」並びに「日本の女性」を紙硯社より出版。前者はドイツの強國の影に強き女性を存在しある事實を敘し、附録として義烈婦人の詠める歌、義太夫に現はれたる日本女性、英雄傑人の母親の三篇を添え、後者は遠くは神代、上古、奈良朝時代より明治大正に至る日本女性の變遷、

其他日本婦人の典型忠孝、貞節、支那事變並に大東亞戰爭に現はれたる日本の母等の外に母を繞る諸問題を附録とす。

▽大阪素義研究 昨年十月第一回を催ほした大阪素玄淨曲研究會は淡路地

五月廿二日正午並木俱樂部にて開催。辨慶(山門)堀川(竹史、松四郎)安達(三由、廿四孝(大嘉津)絃(猿藏、ツレ琴、松四郎)白猿氏病氣にて缺演。

なほ前回は四月廿四日同俱樂部にて開催し、同白猿氏病氣缺演に依り岩崎が昇氏が代理出演。

▽三 好 會 五月廿二日駒形俱樂部に開催。十種香(滿壽三)鳴門(喜三香)寺子屋(津満子)壺坂(梅聲)忠六(燕糸)絃(二三壽、三好)

▽日本精神作興の會 大日本淨曲協會は上野松坂屋ホールにて人形或は義舞を以て淨瑠璃會を催ほし日本精神作興にとめて來たが、此の努力を文部省翼贊會の認むる處となり、愈々近く翼贊會、産業奉國會並びに淨曲協會共同主催の下に産業戦士慰安を兼ね、大々的日本精神作興の會を開催する事になつた。會場は軍人會館又は日比谷公會堂に決定するらしい。

▽女義若女會 會場東橋亭。第六十

方講演の岡田蝶花形氏の歸途を擁し、四月廿一日午後五時より道頓堀俱樂部に於てその第二回を開催、義太夫に關する一切の事項を話題に、席上眞演として大原幽學(蝶花形)柳(重太夫、廣助)があつた。

▽井上泉氏三週忌 井上泉氏逝いて既に三年。三年前泉氏は隠退披露會を企てこれが開催の準備中病魔の爲め倒れ、披露會が追善會に變つたのであつたが、これには齋藤山生氏の盡力多大なるものあり、五月廿三日は三週忌に相當するので、齋藤氏は泉氏を偲ぶよすがにと當時の出演者諸氏へ番茶を贈つて故人の冥福を祈つた。

【前號訂正】

前號鈴木和樂氏を偲ぶ記事で豊澤猿藏氏談十六頁上段一行目本籍とあるは本席の誤りにつき訂正。

東都五十義會版

帝都唯一の審査會として傳統を誇る東都五十義會第卅八回春季大會は六月廿三、四、五、六の四日間濱町日本橋俱樂部に於て、長谷川文久、吉田三芳、高瀬操、安藤光榮、竹本住大夫、野澤吉彌、豐澤團友氏(以上順不同)審査の下に開催する事になり、出演者は連日の猛稽古に強量腹力共に練えられ、氣鋭また高座を呑むの勢ひを以て當日新進古豪の熱演はいづれが快勝の榮位を勝ち得るか、會期接近につれて活氣は帝都の素義界を沸騰させる事であらう。

德島だより 三審社同人

東都五十義會 幹 歡迎 淨瑠璃大會

期 日 十八年四月二十三日正午開演

會 場 德島市天神下日本婦人會館

主 催 德島素義互道俱樂部

(初日番組) 國民儀禮式、主催者歡迎の挨拶、酒屋 相原うづら、松十郎) 寺子屋(長谷川文久、龜造) 新口(高瀬操、猿三郎) 彌作(安藤光榮、龜造(堀川) 吉田三芳、猿三郎、

けんものと筆持つ手持ち無沙汰、「皆んなあんじようやつてるがナアツ」感興置く能はず、満場次第に息を飲む。淨曲隆昌の地元連の面目躍如たるものがあり、「やはり淨曲は聴かすもの」との感を一入深くせしめた。

去る三、四日の連休に眉山お瀧の櫻花に浮かれて押出し銃後警察の取締の手をやかせたと云ふ御連中も、今日一日は縁りも深きその山麓の日婦會館にゆつくりと古典藝術に慰藉せられ、その素直振り感銘亦意義深く、出演者一同亦得意絶頂

歡喜の裡に明日の番組口上に來會を謝し、夕刻上々首尾にて散會。

(二日目番組) 紙治(相原うづら、松十郎) 沼津(安藤光榮、龜造) 玉三、吉田三芳、猿三郎 日蓮記(長谷川文久、龜造) 壺坂(高瀬操、猿三郎、ツレ龜造) 近八(清、吉彌) 大切合同掛合忠臣藏七段目(由良之助、光榮、力彌、九太夫、近作、伴内、すぎ、喜太八、可笑、彌五郎、常盤、重太郎、たくみ、お輕、操、平右衛門、三芳、絃、猿三郎)

明くれば十三日、昨日にかわる日本晴、空も心もすがしくお瀧の山の緑も愈々深く聴衆更に加り絃の響も聲も亦一段と冴へて昔より茲に眞言靈地として且又阿波淨瑠璃の發祥地として精神文化の恩澤に薰陶受けたる聴衆は殊更藝

ツレ、龜造) 大切人形割合邦(一番長原小玉、二番加郷たぐみ、三番大藤可笑、四番奈木常盤。絃、呂調

萬山緑濃き中に寺社の墓、そこ此處と點在し、櫻花今を盛りに ぎ競ふ阿波眉山の景色も今日は亦昨日に續く花曇り、遍路の杖つく姿もそぞろ急わしく張切る一行も空を眺めて歎息一番、如何にやと心許なく安ぜしも幸ひ春雨の弄れもなく、山麓にこだまする三絃の響に誘はれて次第に押掛ける聴衆は定刻早くも満員、そのざわめきの裡に開會を宣し、嚴かに國民儀禮の後、主催者側の代表者立て歡迎の挨拶を述べ、「戦時下銃後國民の覺悟と今後對處す可き思想戦に如何に勝ち抜きやを力説し淨曲が之に貢獻する所以に言及し東都五十義會幹部の來演意義深き」事とを絶賛すれば、之に對し一行を代表して東都五十義會々長細川清氏その歡待を謝し感激の挨拶を交し、斯くして同好の和氣愈々固く會衆亦之に和し、銃後慰安の一時、拍手とどよめき引きも切らず、出演者又之に應へてか聲響場外に人を立たすの力演に次々力演に、袖引き合ふ聴衆の賞賛限りなく帝都素義代表の面目を掛けての熱演と歡迎の拍手に愈々高潮し、呼物の大切掛合に至り地元連の應援、人形割競演と云ふ趣向に、亦々人氣沸騰、果して面汚しの天狗は誰か? 興味深く……然し仲々調子よく絶句する者もなく墨ぬりつ

道批判に一角の識見あり。

語るもの聴くもの互に藝道に歸一して、有終の成果いよ^く沸き立ち、感歎の聲と拍手に會場を壓し、大切東西合同掛合仲よく競演、忠七茶屋場を演出、地元名妓近作、すぎ、其他一黨の應援を得て、唯太鼓や節三味線も賑かに、大石苦肉のどんちゃん騒ぎ、結局スバイ九太夫を殺つつけて、時局認識を新たにし防諜に一針、芽出度千秋樂、一行は四國巡拜の旅に立つ。

▽第卅八回出演豫定人員約壹百名(無審査を除く)▽出演申込締切は五月末日限りとし、受附締切は郵便局の日附印に依る。▽語り時間は十五分乃至十七分とし、駒場決定後は語り物變更を許さず。▽會費金貳拾圓(外箱屋金貳圓)

東京市本所區東兩國二丁目四

東都五十義會

電話本所〇八一八番

本號と次號に五十義會版を設ける事にしました。

本號には大會開催前に會長細川清氏の抱負を聞いたたり、先着出演者の氏名も發表したりしたいと思ひましたが、多忙の氏は在宅定かならず、遂に面會の機を得ず、此編輯を終りました。

記者

◎本欄は大會又は新生の會を報道致します。
◎開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。
◎持種の催はしの外、前書を略します。
◎番組送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります、御諒承を乞ふ。(掲載順不同)
◎なほ見出しに二號活字を使用、特別掲載方御希望の會は其旨御一報を乞ふ。

太 棹 社

中老會春季大會

中老會は春季大會を横濱長友俱樂部に於て五月一、二の兩日午後四時より左記番組に依り開催。吾鈴、東好氏は應援として出演。

(初日) 鰻谷(吾鈴、絃平) 陣屋(義昌、綱助) 河庄(越巴、和歌吉) 忠九(昇、猿平) 阿漕(春和、絃平) 大晏寺(桔梗、綱助) 橋本(操、道之助) 忠七(由良之助、あるを) 重太郎、桔梗。彌五郎、春和。喜多八、越巴。お輕、義昌。力彌、源吾。平右衛門、呑笑。綱助——(二日目) 戀十(東好、和歌吉) 逆櫓(呑笑、絃平) 先代(奇聲、和歌吉) 安達(巽、猿之助) 彌作(あるを、すゞ江) 帯屋(盛鶴、絃平) 本下(美峰、猿之助) 野崎(久作、越巴)。お光、東好。お染、奇聲。下女、源吾。母、春和。

東都聲義會春季大會

東都聲義會々々長齋藤山生氏は淨曲協會の事業繁忙の爲め會長を辭任するといふ事であつたが、同會幹部諸氏の懇請もたし難く再び留任する事になり、會長並びに幹部諸氏の盡力にて出演者多數を以て捲土重來、十四日を初日に十五、十六の三日間茅場、宮松亭に於て神馬里芳氏は犠牲的に三日間共序口を承り華々しく開催。恰も初日は警報發令中とて、常に淨瑠璃を眞に活かして日本精神の作興を圖るといふ會長の抱負も大に發揚されたのである。

(初日) 三代記(里芳、勝助) 毛谷村(冠之、勝八) 柳(翠瓢、綾清) 逆櫓(雅樂、綱助) 寺子屋(琴歌、美之助) 柳(喜勇、勝助) 揚屋(久松、新造) 忠四(喜らく、勝助) 沼津(司光、綾清) 堀川(末廣、土佐廣) 寺子屋(叶昇、新造) 陣屋(花菱、土佐廣) 寺子屋(登盛、猿昇) 先代(壽瓢、綾清) 壺坂(翠松、新造) 油屋(若狸、才綱) 鮎屋(吳光、新造) 長局(山生、團吉)——(二日目) 蝶八(里芳、勝助) 柳(喜鶴、鶴玉) 寺子屋(愛樂、素女若) 陣屋(喜玉、鶴玉) 忠四(一、良造) 鳴戸(喜昇、猿喜知) 新口(喜光、團七) 太十(芦鶴、仙十郎) 陣屋(ぼくろ、團市) 新口(君光、都太夫) 寺子屋(久春、團七) 太十(一昇、染登) 十種香(光華、素女若) 蝶八(紅陽、染登) 赤垣(松鶴、素女若) 山名屋(貴昇、猿藏) 太十(好玉、鶴玉) 宿屋(久子、猿喜知) 山名屋(團鳳、仙十

久松、あるを。和歌吉、ツレ、すゞ江)

靜淨會春季大會

第七回靜淨會春季大會は、靜岡の渡邊正勇、諏訪義好、石井素竹、清水の久保田聲保、榊原安樂、西貝湊の六氏が参加出演、左記番組に依り五月十一、十二兩日正午より並木俱樂部にて賑々しく開催。

(十一日) 柳(翠瓢、綾清) 宿屋(義勝、綾清) 陣屋(以呂波、扇之助) 大文字屋(梅月、廣三) 陣屋(喜城、猿喜知) 合邦(太平、團市) 又助(壽昇、文俊) 儀作(喜香、猿喜知) 太十(治光、綾清) 戀十(痴樂、米翁) 陣屋(美翠、巴住) 沼津(司光、綾清) 堀川(靜壽、團市) 吉田屋(光玉、綾之助) 玉三(正勇、勇之助) 紙屋(義好、綱助) 岸姫(淺路、綾之助) 陣屋(竹史、猿之助) 近八(力、道之助) 合邦(素竹、越駒) 先代(湊、勇之助)——(十二日) 日吉(喜松、小勝) 十種香(翠瓢、綾清) 長局(東、猿昇) 合邦(喜城、猿喜知) 鮎屋(痴樂、米翁) 太十(好玉、鶴玉) 辨慶(勝駒、越駒) 陣屋(喜玉、鶴玉) 佐太村(喜香、猿喜知) 安達(蝶花、勝助) 鳴門(猿若、清司) 千兩轆(駒代、綾柳) 瀧(安樂、綱助) 本下(壽瓢、綾清) 又助(龍司、綾清) 沼津(聲保、綱助) 宿屋(綾登、綾清) 大晏寺(桔梗、綱助) 徳永(靜翠、時田) 靜史氏は缺演。

京濱素義聯盟大會

京濱素義聯盟會は第十二回春季大會を五月二十三日より三日間大井見番樓上に於て開催。

(初日) 寺子屋(十三三) 太十(美幸、朝見太夫) 寺子屋(喜照、綾之助) 長局(一朝、染登) 八百屋(歳榮、歳太夫) 柳(新翠) 新造(岸姫) 淺路、綾之助(安達) 喜光、都太夫(揚屋) 久松、新造(壺坂) 光玉、綾之助(先代) 都仙、都太夫(合邦) 小柳(新造) 太十(都洲、都太夫) 先代(一廣、綱助) 本下(さ章、朝見太夫) 沼津(かなめ、都太夫) 鮎屋(吳光、新造) 十種香(都十、都太夫) 陣屋(義昌、綱助) 寺子屋(都玉、都太夫) 本下(共樂、新造) 大晏寺(桔梗、綱助)——(二日目) 山別(君久子、雷米) 宿屋(義昌、和孝) 太十(好玉、鶴玉) 柳(當枝、森本) 合邦(中次、和孝) 鳴門(美幸、朝見太夫) 日吉(美竹、雷米) 陣屋(喜玉、鶴玉)

宿屋(正鳳、道之助)先代(奇聲、猿玉)柳(喜鶴、鶴玉)安達(喜鳳、道之助)白石馨、雷米)彌作(雅樂、綱助)先代(喜聲、語勇)儀作(鳴門、猿之助)岡崎(旭、道之助)沼津(十三三、綱助)安達(三巽、猿之助)忠四(紅司、綱助)壺坂(操、道之助)忠九(關路、猿之助) (三日目)油屋(關路、雷米)先代(金幸家、清調)十種香(春日、雷米)野崎(守田家、清調)太十(新昇、新造)伊賀五(都、絃平)寺子屋(叶昇、新造)松王(豊國、絃平)陣屋(淑登、文昇)壺坂(翠松、新造)逆櫓(吞笑、絃平)中將姫(櫓、鶴助)玉三(巽、絃平)本下(柳正、猿女)先代(里芳、勝助)壺坂(登調、猿女)矢口(叶、扇之助)紙治(司、猿女)安達(東光、森本)玉三(辰和加、新造)

因會女子部 春季大會

日本義太夫因會女子部は五月二日午後一時より飛行館にて春季大會を開催。

(第一部) 辨慶(素女)又助(佳仙、清二)野崎(駒龍、津賀昇)中將姫(團雀、清二)揚屋(綾作、金衛)儀作(若好、巴住)安達(素八、駒登久)湊町(越道、巴住)合邦(小津賀、紋教) (第二部) 宿屋(素次、清三)志渡寺(猿春、三生)御殿(重之助、猿幸)鳴門(彌周、三生)本下(小和光、清三)寺子屋(綾千代、猿玉)鮎屋(越駒、團光)太十(素昇、猿玉)大切。千本

(初日) 草履打(佳世子、駒榮、清二)沼津(佳仙、清二)彌昭、駒清)寺子屋(猿春、三生)素昇、猿玉)紙治(越道、巴住)小津賀、紋教)先代(綾之助、清一) (二日目)白石(佳世子、素次、清三)太十(綾作、金衛)住若、清一)朝顔(綾千代、猿玉)綾清、仙照)辨慶(重之助、猿幸)素八、駒登久)壺坂(綾之助、清一) (人形)桐竹貴美子、芳子、久子、靜子、千恵子、清子、貞子、和恵、勝子)

平安素人淨曲會

京都平安素人淨曲會春季大會は伊東柳平、武田眞若、加藤其笑三氏審査の下に五月十四日より三日間八坂俱樂部にて開催。同會は京都市東三本木通丸太町上ル平井橋吉(大和)氏方に事務所を置き、五月三日出演申込みを締切つたが、番組其他は本號編輯の間に合はず、次第に採點表を掲載。なほ東京よりは絃平連の坂本あるを、東都、田中吞笑、菅豊國、杉本花房、井上巽、沼井盛鶴、扇之助連の行田以呂波、西源緑氏の外、謳うつや、黒川叶雨氏が無審査にて出演。

旭勝會春季大會

大連の旭勝會は四月十七、十八兩日同市社會館に於て左記番組に依り春季大會を開催。(初日)日吉(旭秀)三代記(うる

櫻道行(靜、綾之助。忠信、住若。ツレ、津賀重、佳世子、駒榮、玉恵)絃(清一。ツレ)清二、清三、清壽、金衛)

因會男子部 春季大會

日本義太夫因會男子部は五月七日午後二時より並木俱樂部にて春季大會を開催。

千兩職(おとわ、路太夫。猪名川、駒登太夫 鐵ヶ嶽、巴太夫。大阪屋、隆太夫。猿藏。胡弓、扇之助)柳(都太夫、新造)安達(仙太夫、松市郎)重の井(津彌太夫、津賀助)忠六(卯太夫、美之助)瀧(駒登太夫、扇之助)新口(朝見太夫、芳太郎)忠九(近衛太夫、松四郎)紙屋(稻太夫、良造)沼津(紅葉太夫、猿三郎、ツレ、美之助)本下(巴太夫、猿喜知)先代(路太夫、絃平)大切。壺坂(澤市、朝見太夫。お里、近衛太夫。觀世音)稻太夫。猿之助。ツレ、猿平、猿藏、猿喜知、猿三郎、松四郎)

綾之助 大會

春秋二回の大會を催ほし、最近は桐竹門造指導の乙女文樂人形を使用して人氣を博してゐる綾之助會の春季大會は左記番組に依り六月九、十の兩日午後四時より日本橋俱樂部に於て開催。一名金一圓五十錢(別に税金九十錢)事務所、淺草區柳橋一の七竹本綾之助方。電話淺草七三五九番)

こ)寺子屋(華玉)柳(旭登)合邦(津玉)忠四(三舛)堀川(橋)沼津(翠香) (二日目)又助(喜笑)太十(前松調)鮎屋(榮枝)太十(興)湖東)紙屋(表具)先代(万華)佐太村(白水)河庄(あさひ)絃(旭勝、旭晴)

豊竹巖太夫三回忌

(寫眞は巖太夫追善會)



素玄淨曲研究會は例年の通り故巖太夫の追善會を主催し、新橋驛前工業會館にて四月二十七日午後四時より研究會第五十五回を兼ねてその三回忌を催ほした。昨年は五十二名出席、今年は以上に盛大にしたいと舞臺のある廣い會場を選んだもので、焼香、追悼座談、食事次いで左記出演者の淨瑠璃を聴いてこれが研究意見を發表、なほ豊澤廣助師のレコード「吉田屋」

佐麻	澤和	增增	武乾	橋平	歸野	星淺	錦金	細藤	橋平	齋木	寺奧	坂影	藤中	柳														
久間	田部	田田	田笠	本井	山島	野田	田川	田本	井藤	村さ	岡村	本あ	山牧	川														
喜喜	喜喜	喜喜	吉桔	鞠軌	世	貴桔	奇錦	金三	三山	山か	三三	三三	淺淡	愛有														
勇氏	角氏	扇氏	香氏	城氏	樂氏	梗氏	月氏	外氏	花氏	昇氏	梗氏	聲氏	松氏	鳳氏	清氏	壽氏	司氏	榮氏	生氏	え氏	幸氏	玉氏	を氏	路氏	路氏	永氏	明氏	
倉田	山花	菊三	龜伊	小鈴	須村	吉北	野橫	吉高	岩西	保後	吉三	山吉	岩西	吉														
田口	田房	地口	藤原	木上	田村	口井	田美	田美	瀨田	村坂	藤坂	並田	良木	村川														
司司	壽紫	秋松	松松	松松	美津	三三	三三	三三	地地	末末	游有	喜喜	玉義	義義	蟻義	喜喜	喜喜											
樂重	瓢蝶	月藤	花鶴	樂寶	義豆	芳葵	と由	句操	成史	曲玉	鳳昌	昇若	雀光	照照														
氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	
大	同	同	米	仁德	三江	時沼	富的	井佐	近白	松魚	池桑	福平	高高	西中	打													
阪	兼	杉	(地	木永	浦原	井岡	野上	藤江	井岡	崎島	原安	山品	瀨内	島矢														
家本	廣山	陶	方	鶴西	廣陶	廣陶	廣陶	廣陶	廣陶	廣陶	廣陶	廣陶	廣陶	廣陶														
峰紫	玉岳	岳氏	部	翠靜	扇清	靜盛	生關	清清	清清	里茂	美美	美美	瓢平	昭新	晋													
氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	松翠	華昇	史鶴	昇路	鳳司	華華	華華	福尚	峰登	茶重	靜平	華水													
氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏													
北安	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
關岩	佐宮	飯原	榎西	栗久	石諏	渡邊	山森	加古	田行	傍國	田小	鈴保	安東	川吉	岡													
崎藤	川川	田原	貝田	田田	井田	訪邊	本本	藤中	田田	島島	林林	木木	東東	奈奈	十													
長山	和和	自安	錦錦	田田	素素	義義	正梅	壽壽	大和	以以	紀紀	鳴鳴	集集	香香	鈴鈴	悟悟	堂堂	司司	公公	源源								
門彦	聲聲	めめ	樂樂	湊湊	昇昇	竹竹	好好	笑笑	魁魁	松松	彌彌	國國	波波	鳳鳳	門門	樂樂	玉玉	雀雀	雀雀	雀雀	雀雀	雀雀	雀雀	雀雀	雀雀	雀雀	雀雀	
氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏	氏氏

計報

片橋國榮氏 本誌名譽會員濱松市片橋國榮氏は永々病氣中の處永眠。
松尾武市氏 東都素義界の重鎮松尾武市氏は五月十六日午後十時四十五分腦溢血の爲め急逝、十九日正午より一時送自宅にて告別を執行。
 哀悼の意を表す 太樟社

編輯後記

◎五月各會の大會に次いで六月は綾之助會の乙女交樂、續いて並木俱樂部で素義連の乙女交樂、なほ又大阪銚後後授會の村上信昇、朝田一朝、石川力、白木草樂氏が上京しての乙女交樂、それに淨曲協會の人形並びに義舞入りの日本精神作興の會と申々賑々しく、此外東都唯一の審査會五十義會の大會が控いてゐるといふ素晴らしい盛會ぶりでありませう。

◎本月の大坂交樂座は吉田榮三、桐竹門造吉田玉造と、次ぎに病氣やら怪我やら造の幸兵衛が代役といふ事でありませう、門年寄る人達の斯うした羅病を耳にする人形陣に一沫の淋しみが感じられます。どうぞ快方の早きを祈り同時に文五郎老にも切に健勝を祈ります。
 ◎會報がどうも遅れるので古くなつて困るといふ方がありますが、日刊又は週刊でな

い限りどうしても前月のものが翌月にまはるといふ事は月刊として止むを得ない事でありませう。それでも出来得る限り新しいもの、その月に、報道をしたいと思ひますので、編輯も一日と延び、彙報欄は組みに「原稿の纏らないうちは手順がつかない」と印刷所から毎月苦情を言はれてゐます。それに缺演者が出て出演者が出なかつたりすると言ふ方もありますが、これは素義の番組程狂ひのあるものではなく、名前が出てゐる缺演をしたり、飛び入りがあつたりする爲めでありませう。それを三日間の會なら三日間正午から終演まで聴いて正確のものを出さず様にといふ方は少くも無理かと思ひませう。會の報道は會の番組に依るもので素義會の番組は缺演者でも何んでも番組通りに出した方が會の盛況が窺はれて好いではないでせうか。さうした意味に於て素義の會は少し古くなつても番組に狂ひがあつても出来るだけ發表したいと努めてゐます。

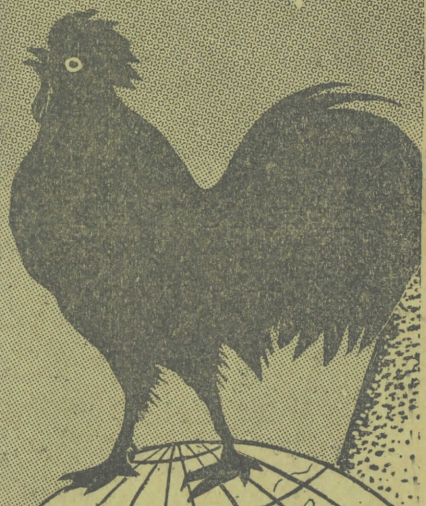
◎交樂座の番組なども毎月出したいたいですが、何しろ發行日が廿五日で、編輯に取りかゝる頃にはまた交樂も當月の開演間もない時ですが、雑誌の出来る時分には終つてしまふといふ有様で、しかも大阪の事ではあり興行でもあり、終つたものを出した處で何んにもならないと思ふので遂に出さずにはゐますが、いろいろ記事の都合でいづれ發行日を變更してこれらの番組も是非毎月出したいたいと思ひます。——富取生——

(行發日五廿月每) 號四十四百第		定 一 部 金 五 十 錢 郵 稅 一 錢 六 月 分 金 三 圓 郵 稅 共 一 年 分 金 五 圓 郵 稅 共
昭和大年四月五日印刷納本 昭和大年四月五日發行	▼誌代は總て前金御拂込の事 ▼なるべく振替に御送金の事 ▼郵券代用一割増	東京市小石川區音羽町一ノ二 編輯兼 富取 壽鹿 發行人 富取 壽鹿 東京市小石川區指ヶ谷町四 印刷所 柏葉社 東京市小石川區音羽町一ノ二 發行所 太樟社 振替東京三一七八五番

食慾増進
芳香美味

料理の味をよくする

チキンソース



CHIOKENSAY

東 京 チ ン キ ソ ー ス 株 式 會 社

昭和十六年三月廿八日
第三五號郵便物認可

昭和十八年四月廿八日 印刷納平
昭和十八年四月廿一日 發行

(毎月一回
廿五日發行)

大 棹 (第百四十四號)

(定價五拾錢)